

森のロバと村のロバ(イソップ童話)

ある森に一匹のロバが住んでいました。誰もロバの世話をしてくれなかったので、ロバは森中を駆けずり回って草を食べたり、川まで出かけて行って水を飲んだりしなければなりません。またロバは、ライオンやオオカミに追いかけて、死にものぐるいで逃げたこともあったし、寒さに震えながら夜を過ごしたこともありました。

ある春の日のことでした。その日はとてもいい天気だったので、ロバは森を抜け出して人々の住んでいる村へ散歩に出かけました。そして、ある一軒の家の前をロバが通りかかると、日当たりのいい小屋の中で一匹のロバがのんびりとごちそうを食べていました。

そこで森のロバは、そのロバに声をかけてみました。

「やあ、こんにちは。うらやましいなあ。君は、こんな立派な家に住んで、その上、ご主人からそんなに素晴らしいごちそうをたっぷりもらえるんだね。」

するとその家のロバは、口をもぐもぐさせながら首を振って答えました。

「とんでもないよ、森のロバ君。僕にもつらいことが色々あるんだよ。」

そのように村のロバに言われても、いつも食べ物で苦労している森のロバにはその意味が分かりませんでした。

数日して、森のロバはまた村へ遊びに出かけました。すると、道の向こうから一匹のロバが荷車を引いてやってくるのが見えました。荷車にはたくさんの荷物が載せられ、たいそう重そうでした。その車を引くロバは汗を流し、とても苦しそうな様子でした。それなのにそのロバの主人は、

「この怠け者！ さっさと歩け！ 早く運べ！」

と怒鳴りながらムチを振り上げ、ピシピシとロバの背中を打ち付けていました。

森のロバは目を凝らしてそのロバを見てみました。するとそれは、先日小屋の中でおいしそうなごちそうを食べていた村のロバでした。それを見た森のロバは恐ろしくなって逃げだしました。そして、

「ぼくはまずいものを食べ、ほら穴に寝ているけれど、自由に暮らしている。村のロバ君のようにごちそうは食べられてもムチでたたかれながら仕事をするより、貧しくても自由な僕はずっと幸せだ。」

と考え、森のロバは自分が住む森へ帰って行きました。

〈874 字〉